
最悪なものを書いてみた。

guromario

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最悪なものを書いてみた。

【Nコード】

N3252H

【作者名】

g u r o m a r i o

【あらすじ】

とりあえず最悪な作品を書いてみました。書き終えてみるとさほど最悪ありません。ただグロといよりはエグくできたかなw

(前書き)

グロが嫌いな人は見ないほうがよいかも W

先にこの話の説明を本文でもあらためてしておきたい。

1話読みきりのものである。

だが内容は恐ろしく最悪なものに仕上がっている。

ここでいう最悪とは描写の問題だ。（かといって執筆能力も低いがw）

グロテスク、残虐、拷問、出血、汚物等の言葉に抵抗があるかた、

またグロ系の作品に抵抗があるかたは見ないほうがいいです。

とりあえず最悪なものにしあげたつもりです。

梅雨も明け日差しが異常なほどに差し込んでくる。

「暑い・・・。」

都心部から離れた山沿いにあるニュータウンはこの時間帯は
妙な静けさを保っている。

このニュータウンから電車で1時間半もいけばうるさい大都心だとい
うのに・・・。

ニュータウンのさらに奥には山の一部を整備した公園があった。

とはいっても少し小高い丘の上にあり木々が後ろに多く茂っている
ところを除けば

普通の公園だ。

ブランコや滑り台といった定番の遊具がある。

「暑い……。」

高村良昭17歳はその公園のベンチで寝転がっていた。

「お兄ちゃん何してるの？」

隣の家の人にたのまれてこの糞暑い中この子連れてきた。

中野美優8歳、小学2年生らしい。

「うるさいなあ……、俺は寝てるから一人で遊べよ。」

良昭はそう冷たくあしらって美優に背を向ける。

「ねえ一人じゃつまんないよ、遊ぼうよ」

美優はそういつて良昭の体をゆする。

ああ暑いし眠い、なんでこんなだるいこと頼まれなきゃいけないんだ。

そりゃ今日は暇だったが……。
家で勉強するのがだるいからきたがこんなにつまらないとは思わなかったぞ……。

これだったら二次関数だとかベクトルとかいったダルイ数学やって

るほうがまだぞ・・・。

心の中で良昭はそんなことを考えている。

「ねえー！遊ぼうって！」

すごくうざい・・・。

餓鬼は好きじゃないんだ。

そうだおもしろいことを思いついた。

良昭はぱつと立ち上がる。

「しょうがねえなあ・・・。」

小さく良昭は呟いた。

「遊んでくれるの？」

美優はうれしそうに言う。

髪の毛を後ろに結びポニーテールにしている。

汗のたれているおでこや姿はまだ初夏だというのにもう日に焼けていた。

良昭は美優の頭を手でつかんだ。

「何？」

美優は動けなくなったので抵抗しようとする。

だが良昭の力に勝てるわけが無い。

「お前ぐら이었다った凶器無しでも殺せるよなあ・・・。」

ちょっと力を入れる。

「ちょ・・・痛いよお」

美優はそういつてその手を払った。

こんどはわざと払われる。

「お母さんにいうよ！」

美優はそういった。

「ハハハハ・・・。」

良昭はニタニタわらながら美優の小さなてをとった。

左手で美優の左手の手首をしっかりと握る。

そして右手で美優の人差し指を握った。

「ねえ、何するの？」

美優はよくわからず言った。

何かのおまじないかと思っていた。

良昭はその人差し指を握る手をおもいつきり上にあげた。

グギッ・・・。

美優の人差し指がありえない方向にひん曲がる。

「ギャアアアアアアアアアアアアア！」

美優がそのばに倒れこむほど泣き叫んだ。

空いている右手で抵抗しようなんて考えにいたれない。

まだ良昭の手元に固定されている美優の左手の指を次々に良昭は折っていく。

簡単に折れるものだ。

美優の指が折れるたびにグギッ、やらゴキッつやら骨の碎ける音と、美優の悲痛の叫びが聞こえる。

「いっっ……めっん、なっさい……。もうやめてよ……。」

美優は左手の手先の感覚がもうない。

泣きながらあやまりつつける。

美優のポニーテールの部分をつかみまた立ち上がらせる。

「歯も簡単に折れるかなあ……。」

良昭はこぶしを美優の顔面に振るった。

ボキッ……。美優の前歯がいつきに二本折れる。

「ううええええええええええん……。うえええええ、うえええええええん……。」

美優の泣き声が丘の上の公園に響く。

そのこえが下のニュータウンにとどくわけもない。

美優を立ち上がらせたまま右手をこんどは美優の左目の前に移動させた。

良昭の親指と人差し指がどんどん美優の左目に近づいていく。

美優は目をとじてていこうするがそれをこじあけた。

二本の指が徐々に美優の左目を犯していく。

グチュツ、ギユルウ、グチュウウ……。

目の組織をどんどんはかいしていき赤い血の前に白い液体が流れ出る。

そして良昭が指に力をいれると、美優は一瞬体が動いた。

手を引くと美優の左目が半分潰れ掛かりゲル状になってでてきた。

ぱっとポニーテールを握っていた手を離すと美優はその場に倒れこむ。

目をぼいっと放り投げ美優の頭を足で踏む。

「うええん・・・、うつ・・・うえ・・・。」

もう大声でなくこともできないようだ。

良昭は美優に馬乗りになった。

そして顔を上に向ける。

まだ残っている右目で美優はこのとき最後の空をみた。

良昭は顔面を殴り始める。

ボキッ！バキッ！、歯やら鼻やら頬骨やらが次々と折れていくのが

感じれる。

何度も何度も顔面を殴る。

しばらくすると顔の原型をとがめなくなっていた。

残っていた左目も殴られた衝撃で膨れた顔から飛び出している。

ポニーテールの髪型と体だけが残り……。

少女は虐殺された。

「素手だとできることが少ないんだなあ、あんまりおもしろくなかった。」

良昭はそう言うときまたベンチに寝転がった。

今度はじゃまする子供もいないで暖かい日差しの中ゆっくり昼寝できそうだった。

殺された少女はまだ小学2年生だった。

書き終えてみると・・・。

大して最悪でないなWW

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3252h/>

最悪なものを書いてみた。

2010年10月29日13時50分発行